セミナーレポート

Red Hat

「Red Hatのエンジニアが語る、今後のJavaの動向とは」

セッション1：Red HatとOSS、サブスクリプションモデル JBoss EAPとQuarkus
セッション2：Javaアプリのコンテナ化の指針
セッション3：Java SEの動向 2022冬版 短縮版
セッション4：事象再現―再現環境作成のコツ

SCSK

SCSKは、2007年にRed HatがJBossを買収した直後、Red Hat JBoss Enterprise Application Platform（以下 JBoss EAP）のリセラーパートナーとして参画し、2009年に日本で初めてのJBoss Premier Partnerとなりました。それから15年以上にわたる提携の歴史を築いてきました。2022年には、Red Hatの日本のシステムインテグレーターパートナーの中でミドルウェアの売上が最も高く、「Red Hat Japan Partner Awards 2022」の「Red Hat Japan System Integrator Partner of the Year」を受賞しました。SCSKは、Javaを用いたアプリケーション開発に豊富な経験を持ち、2023年3月7日にはRed Hatのエキスパートを招き、Javaに焦点を当てたセミナーを開催しました。本資料は、当セミナーの内容を共有するために作成されました。

セッション1

Red HatとOSS、サブスクリプションモデル JBoss EAPとQuarkus

レッドハット株式会社
スペシャリストソリューションアーキテクト
瀬戸 智 氏

最初のセッションは、レッドハット株式会社 スペシャリスト テクニカルセールス本部 ソリューションアーキテクト 瀬戸 智氏によるRed Hatのビジネス概要と、同社がサポートするアプリケーションサーバーであるJBoss EAPとQuarkusの特徴や使い分けの解説がなされた。

ミネラルウォーター提供に例えられる、Red Hatのサブスクリプションモデル

Red HatはOSSを基盤としたビジネス活動を展開している。瀬戸氏はまず、同社の概要やOSS、ビジネスモデルについて解説した。単にOSSの詰め合わせを売るだけでなく、エンタープライズ利用に耐えうる各種機能やパッケージの取捨選択、徹底的な品質保証プロセスを経た製品のリリース、そして長期的な製品サポートを提供している。なお、Red Hat 自体は2019年にIBM傘下となったが、独立した組織として活動を継続している。

OSSは一般的に、オープンなインターネット上の環境でソフトウェア開発を行う有志の集まりが開発を担当する。規模は小さいものから大規模なものまで多様で、今では分散開発手法として高度に洗練されたものとなっている。Red HatもOSSの開発コミュニティに参加し、それらの成果物を組み合わせて、安定した利用ができる状態でリリースしている。この開発への貢献の一例として、Linuxカーネルが挙げられ、Red Hatは大きな貢献をしている。

OSSは無料で利用できるものの、運用は自己責任でありサポートはない。ユーザー企業がOSSを自身のビジネスに活用したいと思っても、なかなか難しいのが実情だ。このギャップを埋めるのがRed Hatが提供するサブスクリプションモデルだ。瀬戸氏は「私たちのビジネスモデルを説明するときに、よくミネラルウォーターに例えることがあります」と話した。